シュヴアイツァーの倫理思想

—「生命への畏敬」の倫理を巡る

椛　田　信　吾

目　次

序論　シュヴアイツアーの人となりと思想的背景
本論　シュヴアイツアーの倫理思想
一、文化の考察
二、生命への畏敬の倫理
<善・悪と生の肯定・否定>
<理性—認識と意志>
<生きんとする意志の世界人生肯定>
<倫理的神秘主義>
三、倫理の諸問題
<自己完成と献身>
<倫理的人格の倫理と社会倫理>
<倫理の三つの敵>
附記

序論　シュヴアイツアーの人となりと思想的背景

大学教授であり教会の牧師であり、又パイプオルガンの演奏において世界屈指の名手であるアルベルト・シュヴアイツアーが文化の世界を去り、アフリカのジヤングルの中に医師として入つたのは1913年であつた。以後半世紀に垂んとする献身的活動はイエスの愛の宗教をイエスに倣つて現実に蒔き育て且実らせつゝあるものとして吾人の驚異である。

しかし彼は単に偉人又密林の聖者であるばかりでなく、現代の文明世界における偉大な救済者としての思想体系を確立した大思想家であり、真知の上に立つ行者の風格を備えた真理の人、それ故にその演ずる音楽が我々に芸術の醍醐味を与えてくれる綜合性の点で、現代の理想の人、偉人の中の偉人とも云える人ではなかろうか。アインシュタイン博士が〃われわれの悲しい世界に一人の偉人な人物が生きている。〃と彼を称讃したが、現代の米ソ両陣営のイデオロギーの相違、利害の対立や、アジア、アフリカにおける異なるイデオロギー、ナシヨナリズムの為の対立争闘が激化しつゝあると思われる悲しい世界情勢裡に、彼の誠実謙虚、奉仕同情の精神と人類社会への発展を説く平和のヒューマニズムが、少しでもより多くの人々の胸裡に宿りうる事が出来たらと痛切に思うのである。

アルベルト・シュヴアイツアーは1875年ドイツ上エルザス（現在仏アルサス）州のカイゼルスベルクに新教徒牧師を父とし、同じく牧師の娘を母として生まれた。この地方は独仏両国の争奪の繰返された地であり、その為住民もルター派ありカトリツクあり、一つの教会を利用し合うといつた協調的な平和な空気に充ちている地に育つた。彼がフランス語もドイツ語も話す事が出来たのも当然であつた[1]。彼が人類の友として何れかの国に属したり、又何らかの団体に属する人の如くなく、行動するのは、彼の性格によると共にかかる環境の影響からとも考えられる。

扨てデイルタイが証明しようとする如く「人の哲学体系も宗教や芸術作品と同じ様に、概念的思惟にではなく哲学体系を作り出した人格の生命に根をもつている人生観乃至世界観を含んでいる[2]。」と思う故に、又シュヴアイツアー[3]自身も語る如く「人の本質と生活とを規定する思想は神秘な仕方でその人の内部に与えられている。……それはその人が幼年期から脱け出すと内部において芽生え始める。少年期の感激に捉えられると花を開き実を結ぶ。……私達はいつでも少年の頃と同じ様に考えたり感じたりする事に一生涯努力しなければならない。成熟それはあきらめの分別である。少年の頃重要視していた思想や確信を次々と放棄する事によつて成熟を手にいれる[4]。」と述べる事を確かめてみようと思う故に、一応彼の生い立ちの記その他の記録の中から彼の人となりや社会、自然、人生、神等についての思い、感激や行動態度を調べ、それから彼の後年の思想体系にどのように発展し、結びつけられたかをあげてみたいと思う。

彼の厳かなものに惹かれる気持、静寂を好む気持は家庭環境から他の人達よりも早くから起こり、彼の生活に欠くべからざるものになつたと語り[5]、彼はその点年令

（1）　シュヴアイツアー全集才一巻生い立ちの記P 205～12参照（以後巻数のみ記し全集記入を省く）
（2）　デイルタイ、世界観学（三笠書房）P 115
（3）　以後彼と記し名を省く
（4）　才一巻P279～280
（5）　才一巻P 250

よりも老成していたといわれる[6]。それ故普通の子供にとつては退屈に思われる礼拝が一種の歓喜で満たしてくれるものであつたという。だが大事なのは決して分かるという事ではなく、厳かなものを体験する事であり、敬虔な祈りに心を打たれる事であつたとして、絶対者に対する素直な純粋さと、之に与える影響を重んじ、神秘的な体験を大事として説いて居る。

しかし彼の宗教心は中学生になり変る。基督教の根本真理は敬虔を失わない儘に思考によつて証明されねばならない。人間の思考力はどんなに崇高な宗教思想も理解する為にあるのだと。彼がイエス伝研究史に於てイエス自身は本質的には後期ユダヤ教の形有上学の中に生きていた道徳主義者であり唯理主義者である[7]と述べている事は思考により証明せんとしたものである。又道徳主義者イエスの考えは彼が大学生時代大いに影響を受けたゲーテの宗教観による処が大であると云える。即ちゲーテが自然の中に神が在し、神は自然及敬虔に自然の中から真実を学びとる人間のうちに現われる精神的なものであり、基督教はイエスの人格及その教義にあるのでなく、精神の最高の在り方としての愛をイエスが告知した事に於て愛の宗教であるという処に真の宗教たる所以があるという考え[8]を受けて、彼はイエス、キリストが己が生命を失いて十字架の道を愛の行に於て進む者にその生涯を現わす[9]。そして重要なのはイエスが待望されるべき御国を自己の内に運動させたのと同一の激烈さを以て、我々が倫理的労作によつて創造されるべき御国という思考を思惟し、我々がそのために一切を捧げつくす事が出来るのでなければならぬ[10]のであり、パウロも考えた如く倫理はキリストと共に死んで甦えつてある事を実行する事であり、それ故キリストと共に死んで甦える処にキリスト教の生命があるとすればそれは倫理に転換せられる[11]。その意味に於てイエスを道徳主義者となしたのである。彼の神学が教会のそれと異なる点である。しかし彼の敬虔な宗教的体験と倫理的意志は愛をその部分とする生への畏敬に於て、自己が宇宙的なものに拡大して、イエスと合一して真理を直接的に会得する事が出来るとするイエス神秘主義[12]と発展して行つたと考える事が出来る。彼の実践に於ける生真面目な粘り強い前向きの姿勢は合一出来るという宗教観を、神秘的に確立させた事に於て保ち続ける事が出来たのである。

(6) ハーゲドン、シュヴアイツアー伝P31
(7) 才十九巻イエス伝研究史P 318
(8) 〃P320～1
(9) 六巻ゲーテ人と作品
(10) 才十九巻P 316
(11) 才十一巻使徒パウロの神祕主義P176、187
(12) 才十九巻P319

次に彼の思想に於ける現実感覚、認識、人生観といつた点に大なる影響を与えている自然観をみる事にする。彼は本来稀な自然に対する感受性をもち感激する少年であつた。彼は自然に対すると常に一種の恍惚状態の中にあつた[13]というし、中学時代自分を取巻く世界の不思議さに魅せられ、時間も食事も忘れる程であつたという。しかし風雨雲雪の背後にある秘密に思いを致し、生命とか力とはその性質上説明しようとしても説明しえぬものではなかろうかと考えたという。しかしそれでも彼は自然を探究し認識せんと努め、彼の好きな学科は歴史と共に理科であり、大学時代に入つても敬虔な心を以て自然科学の研究に没頭するのである。即ち宗教的なものに対すると同様自然に対する感激の体験と尚その中にあつて合理主義的に思考認識せんとする努力が併行して続くのである[14]。そしてゲーテが自然の中に神が在す。有限界に於て探究しうる事をすべての面にわたつて追求し、探究する限り理解し自然から学ぶ、探究出来ない事は謙虚に敬い、自然とは未知なる中心点から不可知な辺境に至る生命と連続であるという考えを受けて、彼の生命への畏敬の倫理に於て、自然世界の認識に於て探究しうるも得ざるも生命の葛藤裡に悲観するが、生きんとする意志が他の生きんとする意志を畏敬すべきを知り、之を肯定し、更に献身により他者との合一に於て敬虔に終始する倫理的神秘主義として自然との調和に入るのである。それにはゲーテの認めた自然の中に潜むデーモン的な力を、自然から謙虚に学ぶ事に於て自らかちとる事によつて調和に生きるに至つたのである。

又彼の宗教観、自然観に影響を与えたものとして幼少時よりの家庭及教会での音楽的感化をあげる事が出来る。彼の音楽的素質は音楽が文字通り指先から滴る程であつた先祖達からの血をうけて居り、音楽的能力は二部合唱をきゝ倒れないよう壁に摑まつていなければならなかつた位、喜びが彼の皮膚一面にしみわたる風の感激をうけ、又ワーグナーのタンホイザーをきいて数日間放心する程の感激を受けるといつた感受性の上に8才からオルガン、引き続きピアノの演奏を学び、10才でバツハに対して目を開いた[15]という。以後バツハの作品演奏と共に「バツハ」の著作三巻を完成し、アフリカに渡つての劇務の疲れを癒すものとなる音楽であるが、しかしバツハから学んだ宗教的人生観というものが彼の倫理の骨肉となりバツハと一体化しているという事である[16]。

(13) 才一巻P227
(14) 〃P225～7
(15) ハーゲドン、シュヴアイツアー伝P29～30 白水社
(16) 野村実　シュヴアイツアー博士を語る 白水社　P36～8,161

バツハの生涯における思索と体験をとおして、信仰、希望、愛というキリスト教で最も大事な真理を〃いと高き者の栄光の為に、隣人の為に、仕える力にして湧き立たせ、フーガにみられる確固とした意志の一貫性不撓不屈の希望をもつてどんな悲観的な事情があつてもそれに負けないで猶前に進んで行くという心を体内に培かいつつ、バツハの音楽の中に生きた力として秘められている霊と生命の宗教を、彼の倫理的神秘主義に発展させていつたのである[17]。

かかる宗教観自然観に基きつつ献身の人生観を抱かせる上に原因せるものとして彼の幼少時よりの周辺の人や生物や世間についての考え方、態度をあげる事が出来る。

彼は子供の頃を父に感謝すると共にいかに多くの人達に感謝しなければならないにも拘わらず口に出さずに済ましたかを回顧して語る。彼は敬虔で明るい恵まれた幸福な生活の中で〃子供には過ぎる位の自由を与えられ〃たのであるが、しかし〃普通の子供の様に無邪気な子供らしい人生の喜こびを味わつた覚えがない。はつきり物心がついてから以来、世の中に多くの不幸をみて悩み続けてきた、大人の様な成熟な少年〃として幸福の中に他人の不幸を悩み、彼等に同情し憐み労わる事を忘れない心の持主であつた。[18] 彼は唯異邦人である故からかわれるユダヤ人を気の毒に思い、子供達の悪戯や悪口に黙つて耐えるユダヤ人の偉さを感じ以後之に倣つて苦しい時も耐えて行つたというがそれは5才の時であつた。又黒人なるが故に奴隷として虐待されても当然と考えられて居た時、その惨めな奴隷の石像を画家と共にみて心を痛めた彼は後黒人を人間対人間の関係でみる事を説き、黒人達は私達に劣る物を多分に持つているとは云え、益々目につく事は彼等の人の良さであり、彼等はその安らかな本性によつて或気品をさへ身につけていると[19] その単純、誠実の点を人類社会の良き成員として受け入れるのである。

又村の少年達の仲間となり、同じ扱いを受けたい為に肉のスープを断ち、マントも帽子も少年達と同様かぶらず、手袋も靴も同じものをつけんとして父から打擲されても頑張り通す彼は人間対人間の関係に於て知合いになろうとし、彼等の本性、人間性を黒人に対する様に捉えんとしたのであると云えるし、又アフリカでの体裁にこだわらぬ質素な服、頑丈な靴、欧米に渡つても変えない服装には簡素平凡単純さを好む彼のヒューマニズムを窺う事が出来るのである。

彼の思いやりや愛情は人間に対するのみでなく可哀さうな動物達にも向けられる。それらが多くの苦痛と困窮に堪えねばならぬ事、馬の疲れを知りつつも速歩の楽しみの為鞭打つた事で後で気になり馬に許しを乞うたり、郵便配達夫に吠えてとびかかろうとする飼犬を制しようとして得意になつてひつぱたいた事を気にし、又友におしつけられて鳥を打たんとして「汝殺すべからず」の戒めの声をきき鳥を追立てて逃げ帰る、魚釣りに行き釣つた魚の口を引き裂くのに恐れをなして釣りをやめてしまう、そして夕の祈りで〃愛する神よ、すべての息あるものを守り恵み給へ〃と附け加える彼のこの思いは、絶対やむをえない場合でなければ殺したり苦しめたりしてはいけないという信念となり、アフリカの病院生活に於て蝿を叩かせず、虫を殺させず、家禽に自由に院内を歩かせる集団生活とさせ、生命への畏敬の倫理に基く生の無差別観へと発展して行つたのである。

彼の世の中の多くの不幸を悩み続ける心は又自分の幸福を自明の事として受けとつてよいものかどうか、権利の問題として真剣に悩み続けそれは1896年彼の21才の聖霊降誕祭の朝迄続く。そして彼は遂にこの幸福は自明の事として受取るべきではない。之に対して何らか自分からも与える処がなくてはならぬ[20]。私達はこの世に存在している不幸の重荷を皆で一緒に担わなければならない[21] という思想に捉われ、自分は30才になる迄は学問と芸術の為に生きるべく許されたと考えよう。そしてそれから後は直接人間への奉仕に一身を献げようと決意し、ここに外の幸福に加えて内心の幸福をえた[22] のである。

そして30才になつた1905年の誕生日に彼は医者となつてアフリカの黒人救済に当る事を欧州全体の回避すべからざる責務として、それ故国民の一人として当然荷わねばならぬ事として聖書にある金持の男と貧しいラザロの比喩を現実の中でたしかめてみようと決心する[23]。彼の神の国が始まるのである。個人倫理の確立による人類社会の建設が始まるのである。

彼の隣人や動物に対する純粋にして誠実な思いやりに加えて、母親譲りの内気な無口な性格の持主ではあるがしかし物事に熱中し何事にも真剣になる之も母親譲りの性格の故に社会や世界一般の出来事に関していい加減な投遣りの態度を許さず、子供にして異常な位現実的な態度で政治に関心を持ち、新聞に読み耽り、社会事象に対

(17) 才十二、十三、十四巻中のバツハの伝記的記述十二、十三巻参照
(18) 才一巻P225、232
(19) 才三巻ランバレネ通信P270～2
(20) 才二巻P107
(21) 才一巻P266
(22) 才二巻P107
(23) 才一巻P11～2

して本質的理解のみでなく発展的に把握する事に努め、伯父もその知識に驚嘆し新聞を読む事を許した[24] という事であり、彼は歴史となるとまるで勉強しなくても出来たという位の理解力に優れていた事が、彼の研究の仕方をして歴史的に発展の跡を文化哲学やイエス伝、神秘主義と倫理に於て調べる事を容易にし、又生来の前向きの真剣な生活態度が今迄の哲学や神学に於て着手しなかつた著作となつたとも考えられる。

又彼のすさまじい読書慾、真実を求め知りつくさんとするつきつめた気持を子供の時から持つていた事は彼は読み始めた本は手放す事が出来ず、立て続けに二三回も読み通す位徹底せねば気がすまぬ頑張り強さを持つていた事からも窺われる。そしてそれはバツハの演奏により益々彼の本性となるのである。

真実にして適切なるものを求めようとする熱烈な欲求は14才から16才迄の間人と会う毎に話に出た問題について合理的に徹底した考察を加え、事柄の根底迄行かないと気が済まず相手をよく困らせたともいう。しかしその事については後で少年時を回顧して述べる[25]。 一緒に居る時を真面面に論ずる事をせず、大人となる成熟の故に少年時の純粋さ、真実を求める心を失う事にこそ悪徳が生ずるのであり、かくして文化を思惟し、文化を支持する世界観の喪失そして文化の崩壊が生じたのである。理想は純化した人間の本質と結びついた時にはじめてその力を発揮する[26] となす。彼は少年達に彼等が感激している思想を全生涯にわたつて保持する様に勧める。それは少年の時の思想は未熟であるとも少年なるが故の純粋さがあり誠実がみられるから、そしてそれこそ人間の本質であるからそれをなくさぬ事こそ最も肝要と考えるのである。彼の生きんとする意志の畏敬こそ単純にして根本的な真理であり、幾何学の公理の様に単純な善悪の観念こそ真の哲学倫理の求めるものであり、単純という事を彼は訪米の際 アメリカの新聞記者に〃 自分は文化を捨てたのでなく、すべて人を助け善を行う処に文化は存在する〃 と語つた事から端的 に説明しているのである。

最後に彼の献身的奉仕について大いなる導き手となり奉仕の精神をふきこんだものとしてバツハと共にゲーテを挙げる事が出来る。彼は学生時代の終り頃偶然ゲーテのハルツ紀行を読んでからゲーテの作品の愛読が始まり、「フアスト」は座右の書[27] となり、彼の活動にはゲーテのとつた行動態度が絶えず想起されるのである。

(24) 才一巻 P256
(25) 才一巻 P259～61
(26) 〃 P280
(27) 才六巻ゲーテ死後百年祭記念講演 P21

ゲーテが内面化された人間であり乍ら、同時に行動する人間たらん[28] として精神的仕事と共に実践的仕事を平行してやらねばならぬと考え[29] 実践的仕事に全力をつくした事、又青年の精神的煩悶を解く為に雨と霧の中を大きな犠牲を払つて真面目に努力する事、又「気高く慈悲深く善良なれ」[30] と努めた事を彼はアフリカに於て実行し、自ら労仂し修理すると共に献身の倫理に各人自己の職務以外に奉仕的仕事に従事すべき事を説くのである。又ゲーテが常に実現されるべき事を、正義を犠牲にする事によつて実現してはならないと考えた事は、彼の倫理の中で、倫理的人格の倫理を社会の名による倫理で人間性を没却する事に対して守らしめる事に通ずると云えよう[31]。

又彼はゲーテの人格の基礎として変わる事のなかつたものは誠実と純粋であり[32]、 その魅力と偉大さは彼のすばらしい真正さと自然さであつたというが、それらは彼自身にも備わつていた事であつた。それ故にゲーテの思想に益々共鳴を覚えた事であろう。ゲーテが思弁哲学の諸体系を研究しつつもそれらは自然に対する無理強いとして却け、人間の心に生じてくる倫理的思想を自然の啓示として受け入れ[33]、 人間をして世界と自然に順応させ、その中で精神的に勝利を目ざすもう一方の見ばえのせぬ哲学こそ原初的なもの[34]として取り入れる様に、我々の精神の眼をわれわれ自身の内なる自然に向け、諦念による精神的指導の下に、深められた世界人生肯定に乗出す事を説くのである。そして誠実こそ精神生活の根底であり、自己と世界との素朴な関係を昂揚させて精神的関係に化する処に、人間の自己の存在に意義を与えうる唯一の道がある[35] とする。

そしてゲーテが自然は常に厳粛であり真実である。すべての誤謬は常に人間の側にある[36] としたが、彼は一切の事件に際して自分自身を顧りみ、事の究極の原因を自己の中に求め、一切の事実は精神力の結果であるとする[37]。

彼の文化哲学における生命への畏敬の倫理は以上述べた如き良き環境、優れた素質それにキリスト教思想及バツハ、ゲーテの思想が渾然と融合発展したものと云えるのである。

(28) 才六巻 P62～3
(29) 〃 P16
(30) 〃 P124
(31) 才一巻 P21
(32) 〃 P27、P40
(33) 才一巻 P60
(34) 才一巻 P12
(35) 才二巻 P270、278
(36) 才六巻 P87
(37) 才一巻 P282

本論　シユヴアイツアーの倫理思想
―生命への畏敬の倫理を巡る―

彼の著作はその内容から三つに分ける事が出来ると思う。即ち牧師としての職業的分野に関するもの、才五巻のイエスや才八巻のキリスト教と世界の宗教、終末論の変遷における神の国の理念等、才十巻、十一巻の使徒パウロの神秘主義、才十七巻から十九巻迄のイエス伝研究史等である。次に哲学者思想家としてのもの、主としてアフリカでの思索による才二巻わが生活と思想より、才六巻のゲーテ、文化の頽廃と再建、才七巻の文化と倫理才九巻インド思想家の世界観（神秘主義と倫理）才十五十六巻のカントの宗教哲学上下等である。そして才三の分は生活報告、自伝等の才一巻水と原始林の間に。生い立ちの記や才三、四巻のランバレネ通信、才五巻の原始林の病院、アフリカ物語等、才十二巻から十四巻迄のバツハ三巻である。

しかし彼の特色とし偉大な所以はよくこの三つの部分が中心思想の生命への畏敬の倫理の体系の一環をなすかの如く著作されている事である。

一、文化の考察　彼の生命への畏敬の倫理を見出す迄の思考の主要部分をなすものは、欧州の文化を捨て、犠牲となつたアフリカの黒人達の救済を欧州社会の責務と感じてジヤングルに入つた彼にとつて、何故にかくも欧州の文化は救済に真剣に努力せず、又その力を持たないか、それ故に過去の優れた思想文化の崩壊は何故に起つたのであるかという事であつた。疑問は既に大学時代から始まつた。人類は果して確手たる進歩発展をとげつゝあるのか(1) と。

彼は云う。今日迄世界の文献で文化とは何であるかと提起したり、之に解答した例は見当らない(2) と。大学時代彼が驚いた事は思惟の歴史がいつも単なる哲学体系の歴史として書かれ、世界観を求める苦悶の歴史として書かれてない事であつた(3)。彼は文化を次の如く規定する。ごく一般的に云えば文化とは個人と集合体との進歩、物質的精神的進歩であり、進歩とは個人にとつても集合体にとつても生存競争が弱まる事である。生存競争が弱まる為には理性が自然と人間の本性とを最大限に最も目的に叶うように広く支配する事によつて実現させねばならぬ。そしてそれは個人と集合体がその意思が全体や多くの人々の物質上精神上の幸福によつて規定されるという事でなくてはならぬ。そして倫理とはかく他人や人間社会の幸福にも留意する義務を感ずる事であり、他人との連帯の考えが拡大する事に倫理の発展があり、文化はかかる倫理に基く進歩をはかる事であると(4)。

かかる倫理はそれ故社会と個人が世界の本質並に目的についての思想、世界における人類と人間との使命、位置についての思想即ち世界観を持つ事に於て全人類にとつて大きな精神的な力となる事が出来るのである(5)。そしてそれは幸福を希望する現世の肯定につながり、その活動に於て善(6) の理念に奉仕する事が出来るのである。

世界観については彼は大きく二種に分ける。根本的な違いは現世そのものを評価する仕方の違いであり、即ち現世の諸々の事柄や現世における私達の生活に関心をよせる肯定的態度と、その反対に無関心である事を勧める否定的態度である。現世の否定は印度の思想家、古代と中世におけるキリスト教の説く処であり、肯定は支那の思想家、ルネサンスと近代における欧州の思想家の説く処である。彼は之迄の思惟の歴史が哲学体系の歴史であり、世界観を求める苦の悶歴史でなかつたとして世界観の探求を始める(7)。1923年からの「文化と倫理」がそれであり文化哲学の才二部をなすものである。

彼は述べる。欧州民族が古代及近代に於て文化を成就したとすれば、それは彼等の思惟に於て楽観論的世界肯定の世界観が優位を占めたからであり(8)、哲学が人間、社会、民族人類について根本的思索を行つてきたからである。18世紀と19世紀の初において哲学は世論の指導者であつた。しかしその啓蒙主義と合理主義から生れた、人間の理性と進歩を論ずる通俗哲学の楽観論的倫理的な全体的世界観も(9) その間に発達した自然科学の批判と反対にあいみすぼらしいものとなり、真理として通用するのは現実を記述する科学だけとなり、全体的世界観は不信を買うに至つた。そして哲学は思弁と難解な専門的用語により過去の哲学の歴史となり世間から疎遠になり、誰にも分るような通俗哲学の思索を毛嫌いする事によつて文化の考察を怠り、その支持の力をなくし、文化理想の基盤となる世界観の喪失を生ぜしめる事になつた。

哲学の価値はその哲学が生きた通俗哲学に変り、深いものは同時に簡単なものであり、又簡単なものとして手渡す事にありとする。之迄の倫理哲学の作り出した善の

（1）　才二巻P179
（2）　才六巻P236
　　文化の倫理的な基本性格（文化哲学才一部）
（3）　才七巻文化と倫理（文化哲学才二部）P15
（4）　六巻P151、238
（5）　才六巻P279　才二巻P189
（6）　この善は生命への畏敬、そのものをさす（後述善悪と生の肯定否定の項）
（7）　才七巻文化と倫理P17
（8）　才七巻P45
（9）　才六巻P210

観念は枯渇したものであり、世界人生肯定を自明の事とし之を明らかにする必要を全く感じないという点で役に立たぬものとなつた[10]。哲学が一般的理性の指導者となり見張人となるのが任務である事を忘れ、理想の為に戦わねばならない事を怠つた処に近代文化の不幸が始まつた。彼の哲学は世界人生の哲学であり、実践哲学である。

世界観を探求する哲学と云えよう。そして文化の物質的成果をよく人間完成という理想と、民族及人類の社会的政治的状態の改善という理想に向つて個人が考え、個人がそれを信念として生き生きと不断に決定する処にこそ文化の本質があり、そこにこそ哲学の価値があり真の倫理があるとして、文化的である事は倫理的でありと考えていると云えよう。

アフリカにあつて文化の崩壊不幸について批判考察をなくしつつあつた彼に、今迄予感もしなければ求めた事もない「生への畏敬」という言葉が心の中にひらめく事により、鉄扉は開け、世界人生肯定と倫理が包含される理念に到達し、文化の批評のみでなく文化の再建の為、文化への意志及文化実現の能力の根底たるべき認識と信念との研究を始める事になつた[11]。

二、生命への畏敬の倫理

人間の意識の最も直接な事実はデカルトが立てた、われ思う故にわれ在りではなく、亦製作し行動し文化活動をなすという事でもなく「われは生きんとする生命にとり囲まれた生きんとする生命である」という事であり、それ故生への意志は生き続けんとする憧憬を含み、死滅に対する恐怖や苦痛を含んで憧憬の充たされる事に努め苦痛恐怖の軽減絶滅に努める処の心情態度を伴うという事である。生きんとする事は本能であり、それ故に価値を低しとみる事は出来ない。本能は我々の意識を用いずに生を全うせんとする仂らきを生れ乍ら持つている。之すべての生物にも通ずる事である。之は原初的事実とも云うべく、又深く生命の真底にあるもので、通常それ程意識せずとも一度それが危険に陥るや猛然として正当防衛に出る。その勢の強いが故に人間の思惟並に意志に対し強く仂きかけるものであり、簡単なるが故に納得されるものであり、一般的直接的具体的事実といわねばならない。之に基く事こそ倫理の根本的立場であり、出発点でなければならないし、道徳的価値の根源でなくてはならない。

<善悪と生の肯定・否定> それ故善とは生命への畏敬その事であり、「善とは生を保ち、生を促がし、発展しうべき生をその最高の価値に迄達せしめる事であり、悪とは生を否定し、生を毀損し、発展しうべき生の昂揚を妨げる事である[1]。」之思考の必然の結果である。

之を広く哲学や宗教が善の根本概念を求めた時見出される愛の原理と比較してみる時「生への畏敬」の概念は愛の概念よりもつと広い。従つてもつと漠然としている[2]。愛とは一方が他者に対して仂きかける仂きであると一般的に云えるが、生命への畏敬は他者のみならず自己そのものの生命への畏敬も含まれて居り、愛よりも包括的完全な概念である。

かかる意味に於て人間が倫理的たる事は、人間対人間の愛、献身等を含む倫理たるにとゞまらず、生きとし生けるものすべてに対する。即ち植物も動物も同じく生命あるものとして苦しむものであれば之を軽減し除いてやり、その生の昂揚を最高の価値に迄高めんとする事を含むのであり、所謂世界人生肯定の倫理となりて完全な倫理となりうるのであり、無際限の生物に対しあらゆる機会に於ける生命の神聖を認め、生の無差別性を認め之を守る事である。人間に近いか遠いかという事により生命を差別して扱うという事は、人間の主観的標準に過ぎぬ事であり人間中心の考えによるものであり、他の生物の生命がそれ自身として、又全世界の中にいかなる意義を持つかは我等の中何人が知る処であろうか[3]。従来の倫理は人間対動物の問題に関しては無理解であるか、又は答える事を知らなかつた。たとえ動物への同情は正しいとするも之を倫理の中に取上げる事は出来なかつたとする。

処が問題は我々が差別する事により、生命を減ぼしたりする事が行われるという事である。それなら人間は生物を殺してはいけないのか。蚊が刺す、蚤がくう、蜂がさすとかいつた時反射的に或は習慣的に之を傷けたり殺してしまう。かかる行為は人間が生命を保持する為に止むをえずなす事であるが、しかし一方を倒さねば一方が犠牲になるという程ではない。にも拘わらず一方的に殺してしまう。かかる場合真にやむをえない場合とは云われないから出来るだけ毀損は避けねばならない。差別する事が許される場合は人間が必然性によつて強制される場合のみである。即ち二つの生命の中一方を救うには何れかの一方を犠牲にするの止むを得ない場合に限る[4]。しかしこの判断をするのは勿論人間である。かく判断する際も我々は反省的に決定し、犠牲となつた生命に対する責任をになう事を自覚しておらねばならぬ。しかし罪には変りはない。生の破壊及毀損によつて常住に罪ある

(10) 才二巻P191
(11) 才二巻P183、192

(1) 才二巻P195
(2) 才六巻P173
(3) 才二巻P281
(4) 〃 P283

ものとならざるべからずという不可解にして残酷な法則に縛られている。動物は無慈悲な人間のためにありうべからざる目にあい、或は子供等の残酷な遊びにひき入れられている。我々が生物を殺す世界は人間の意志をして順調に楽しませてくれるものではない。世界は自己矛盾している生活意志の演ずる訳の分らぬ見世物の観を呈している。そこでは他のものの生存を犠牲にして自己の生存を保持している。世界は壮麗であり乍ら恐怖すべきものであり無慈悲なものである。筋を通つていながらも不条理であり、喜こびであり乍ら苦しみである[5]。人間が自然世界の生起に対し認識理解を持つ範囲を理性、精神が人間の中なる自然なるものに従つて、超出しようとして一切に責任を感じ、即ち生きとし生けるものへの無辺際の責任を感ずる[6]。人間は苦しむと共に喜びを感ずる自己矛盾に於て無常を観ずると共に無の立場に立つ自己が天地万物と一体となり、生命そのものの神聖を敢て肯定する、生の肯定の倫理に従つているのである。そして人間は一枚の葉も木からむしらず、一輪の花も折らず、一匹の虫も踏みつぶさないように注意し、夏の夜燈火のもとで仕事をする時は昆虫が相ついで翅を焦がして卓上に落ちるのをみるよりも、寧ろ窓を閉ざして重苦しい空気を呼吸するのをとる。水溜りに落ちた昆虫の側を通れば、葉一枚なり茎一本なりをわざわざ救いにさし出してやるという風に、すべての生物に対し凡そ可能なる限りの事をなせという強制が我々に生じなくてはならぬ[7]。

<理性ー認識と意志> かかる生命の神聖、生命への畏敬を認める世界人生肯定の倫理は真理として何処迄現実に即し、亦学問的に論証しうるものであろうか。人間が犠牲を必要としながら、又それ故に苦痛を感ずるにも拘わらず、何故喜こび筋を通つている世界と解する事が出来るのであろうか。

自然科学は世界生起の現象を認識し、その存在の構造その変化の中の因果関係、亦存在相互間の仂らきを益々明瞭にしつゝある。しかし顕微鏡をのぞき、生きんとする意志の無数の形態を研究し、それらについてあらゆる知識を持つが神秘に打たるゝ事なく得々然たる学者よりも、現象の底に流るゝ力、意志の神秘不思議を想到し、その力が何時何故動き出すのか止まるのか分りえない不可解不思議に思いを致す無学者の方が、自然世界に対しより自然に忠実な自然な態度をとるものと云えよう。自然は驚く程創造的であり同時に無意味な破壊する力である。途方に暮れて我々は自然に対する。我々が世界の中で見出す合目的性は人間の立場に於て考えたそれ故に孤立した合目的性でしかない[8]。我々が無意味と思うものの中に有意味があるに違いないのだ。我々が有意味と思う以上のものが宇宙の本質として求められる。しかし無限の宇宙に我々を目標とするような或は我々の実存によつて説明のつく意志を賦与するような僭越は許さるべきでない。彼はゲーテに似て自然を厳粛なものとして畏敬するが、自然から学ぶ態度を維持する。そして私達が私達自身と世界における私達の位置を理解しようとする時、私達の意識に直接与えられている事は私達が生きようと欲する生命であり、生きようと欲する生命に取り囲まれているという事である。完璧で十分な世界認識は私達のよくする処ではない。世界についての私の知識は外部からの知識であり、常に不完全に止まる。秋達が人間と人間との関係について考えてみても、私達が通例認めているよりも遙かに多くの神秘が潜んで居るのではなかろうか。何年も前から毎日一緒に暮している相手でも本当にその人を知つていると主張する訳には行かない。私達はどんなに親密な人達にも自分の内的体験をつくり上げているものの断片をしか伝える事が出来ない。全体を示すという事はできないし、出来たとしても相手がそれを促える事ができないだろう。私達は相手と道連に何か経験したり話し合う時にしか分らない。それでも各人の思いにより受けとり方も違う事もありうる。そして後はそれぞれの思いの中に歩んで行く。私達は互に知りあうという事は相手のすべてを知りつくすという訳には行かない事を知りつゝも、愛と信頼とを互に抱き合う事に於て、互に信じ合う事に於て、よく知る事が出来るのである。信は力なりというが、生きんとする意志が、内から人間を知らんとする意志を直接的に根源を求めて神秘的に認識と結びつけて思考的体験となつて、相手と合一する事に於て、相手を知る事が出来るのである。人間に対しても知りつくしえないなら況んや他の生物やその他の物に対しては尚更であろう。しかし世界の一切のものが私達と同じように生命であり、それらの生命に私達は取り囲まれているという事実を、私達の生きんとする意志が直接的に認め肯定すると共に、更に生命が神秘に充たされているという事を生命の神秘的感動に於て直接的に知るという事から出発するという事は、自然的であり、神秘主義の用語で「知識ある無知」と呼ばれているもの即ち無知であり乍ら本質を知つている無知に相応するものであり、揺るぎない世界人生航路であり、真の倫理の立場と云えるのである。

合理主義的な普通の熟慮による理性思考でなく、かく

---

(5) 才六巻P171
(6) 才七巻P324
(7) 〃 P313
(8) 才七巻P267

思惟必然的な神秘主義により、悲観論的認識によつて疲れて沈む代りに、思想を喪失した生きんとする意志は帆を張り、無限の海に確乎たる進路をとつて進む事が出来るのである。世界を知ろうとする生きんとする意志は無制限の存在の中で、無意味な恐怖の思いの中に難破しようとも、自己自身を知る生きんとする意志は己れを生への宇宙的意志と存在一般とのうちに促え、それにより確乎たる針路をとつて、より深められた世界人生肯定の海を進む事ができるのである[9]。

彼はいう。理性は広く精神のあらゆる機能が生き生きと作用し合つている全体の状態である。認識と意志はその中にあつて私達の精神的本質を規定する神秘的な対話を互いにかわし合うと。認識や意志を媒介とした究境において認識や意志に尽されない部分を含みつゝ認識や意志を越え、合理主義と神秘主義を一体化させ、主体的に万有の外へ超出して、カント的な物自体や神の存在を含む宇宙的意志の現前に導かれ[10]、単純に生きる神秘主義となつて高揚されるのである。

処で従来の哲学は人生における認識と意志との関係を哲学と倫理学の両部門別々に考えた為に両者の関係が明らかにされず煩雑な認識論となり、枯渇した形式主義の倫理学に堕したと彼はいう。

<生きんとする意志の世界人生肯定> 生きんとする意志はどのように現われるであろうか。それは充分に生き抜こうとする事に現われる。個体保持、種族保存の本能に於てである。人は決して自分一人だけで己が生命を生きる事はできない。互に相依りて生きる故に感謝しなければならぬ。そして我々自身及我々の影響を受けうる一切の被造物を、最高の物質的精神的価値に齎らそうとする欲求を、人間の内的必然性から当然の事として認め、すべての世界に加わる苦痛の重荷を共に荷い、自然の中にあるすべての生命に我々がつながつている事を知り、彼等の救済を齎らさんとして、苦痛を共に悩む事より身を引かず、対象の生命肯定を遂行する手段として献身する時、すべて被造物を対象とした世界的な、合目的な倫理的立場に立つと云えるのである。

けだし我々は日常の生活に於て日常的事実として他者を手段として利用し否定せんとして、その意志を尊重し人格を認め、その後に自己を規定せられて自己を否定し、他の為に献身奉仕するという部分的な生命肯定と生命否定を交錯させつゝ[11]、自他の連関を、両者を否定する自他不二の間柄に構成維持しているのである。問題は人間以外の生物に対してどれだけ之を考慮しているかという事である。我々が世界的であり合目的的な人生肯定である為には人間中心的な孤立した目的のものであつてはならないのであり、そこに殺戮の残酷性をどのように解し、献身価値の高揚に努めうるか、責任を感じるかという事である。人間が生きる為にやむをえず差別し、植物や動物をとつて食物とする時罪を意識し自主的反省的に判断し責任を持つという事はいかなる事か。出来るだけ生物を殺さず自然界における弱肉強食的現象を減少する努力を人間がはかり、最小限度に止める事が現状での責任と考える以外仕方がないのではないか。人間の世界に於てもやはり現実は悲観的であるが、人類社会の確立の為に生の無差別性の下に価値の増進に努めるという楽観に留まる以外はありえないのではなかろうか。

彼はいう。勿論生きんとする意志は普通の幸福成功を願う。だが人は幸福と成功によつて生きるのではない。彼は感謝して之を受けとるが生命への畏敬の道を行く為に自己の幸福と成功が拒まれようとも気にせず、直接的根源的である己の生命と之をとりまくすべての生きんとする意志に価値を与える為なすべきが故になし能うかどうか分らなくとも、自己自身を無際限に活動せしめ〃わが為に己が生命を持てるものは生く〃の気持をもて黙々としてやむ事のない責任感[12]の不安の中に、諸価値の創造に努めなければならない[13]。そして彼は収穫を見る事をせず種蒔く者の如く[14]、又他人を審く事でなく唯自己自身を審く事によつて自身との闘争、自身に対する真実によつて他人に仂らきかける。真の倫理は言葉の使用がやむ処に始まる。そこに見られる者は前進する意志への感動であり、結末を尋ねない処の敬虔である[15]。無我の境地における世界からの自由を体験するという祕儀によつて人々の魂を打つ。しかしそれは外的にではなく、内的にこの世から自由になつたのである[16]。そこにはヤスペルスが云う如く、包括者の中へ沈潜し語る事が出来ないと認め、合一という沈潜に本質的なもの、倫理の根底を見出す神秘主義者が見出される[17]、又脱自に迄導かれた心がその深い宗教性の立場を再び日常の実践生活へ移し入れている[18]とも云える。そこには本人

(9) 才一巻P274～6　才六巻P171P288～9　才七巻P277～8

(10) 西谷啓治、神秘主義の倫理思想（岩波倫理学講座才十四巻）P3

(11) 才七巻P289

(12) 才九巻神秘主義と倫理P288

(13) 才七巻P24P314

(14) 〃　P280

(15) 〃　P318

(16) 才十一巻パウロの神秘主義P206

(17) ヤスペルス、哲学入門P46（新潮文庫）

(18) 西谷啓治神秘主義の倫理思想（岩波倫理学才十四巻P19）

は結末を問わないでも平気であり、価値付与の意識が規範を宇宙に求め、その意志を誠実に生き抜かんとする、所謂認識や意志と異つた両者の一体化の上に立つ神秘的な倫理が見出されるのである。

<**倫理的神秘主義**> 彼においては宗教と倫理とは人間が人間として生きる為の根本原理であるが、今迄の倫理学は普遍的であつたとしてもその内面的な点と根本的な点に欠けているので現実との対決を生ぜしめうるものになつていないという。真の倫理とは現実的に刻々に変化する事態に対決しても揺ぐ事なく活動し続けるものでなければならない。又宗教も特にキリスト教的なものとして示される限りでは、イエス礼拝というよりもイエスは道徳主義者であり[19]、 イエスの愛の告知を神の意志として吾人の内心に体験する事であるとして、絶対なるものは直接的に会得する外ないとして[20] 神秘主義的である。

イエスが我に従えと説きその教えに従う事に於てイエスは彼が何者であるかを現わす如く、又神の国が我々の心の中に存在しなくては神の国は世界の中へやつてくる事が出来ないと[21] 説く如く、生への畏敬が我々を捉えて離さず、我々がそれと一体となり神秘なる生命と合一した時、宗教と倫理は引きはなしがたいものとなつている[22] のである。彼の倫理は神秘主義的であり、宗教的倫理であると云える。

処で彼は神秘主義には二種類あるという[23]。一つは世界精神と人間精神との間に存する同一性を認める事から生ずる神秘主義であり、印度や西洋の神秘主義であるが、それらは倫理的ではなく又倫理的になる事も出来ない。何故なら単なる楽観論的世界人生肯定であつたり、又生そのものの存続を否定しつゝも之と矛盾して生きるという意味の悲観論的人生否定であつたりでは、人間精神の主体的思惟、決断に基く自由な活動というものがみられないからである。たとえ自己完成の倫理を説くとも人生否定の神秘主義では消極的であり、肯定のそれも能動的であるとしても、矛盾なき流動的な動きにおける肯定の楽観的行動では現実に対抗出来ないものであるからである。

之に反し倫理に基づいている神秘主義こそ徹頭徹尾実際的である[24]。それは世界精神や世界事象が諸々の生起の中にあつて闘争矛盾犠牲等をみるにつけ、不可解であるという事実を深く承認する。認識の面では悲観であり、その相をみて悲しむ。同一性の神秘主義はこの経験知を軽視し、経験知に対抗して直観的な世界認識を楯にとつているのに、倫理的な神秘主義は究極的な生の認識について神秘とするが、経験知を生の外部からみるという点から意味を認める。そしてそれにより悲観するとしても之に気落ちせず、生を内部よりみて生きんとする意志を認め、之に期待し希望する事をやめない。諦念の上に立つ安らぎは、ゲーテが思惟する人間の最大の幸福は探求しうるものを探求し尽し、探求しえないものを安らかに崇敬する事である[25] というに似て、外的条件によつて定められた宿命から内面的に自由独立たるべく精進を続けさせる[26]。

かくて貧弱な人間精神は孤立から脱して、自己の生を自己のためにのみ生きず、自己と挑戦するすべての生命を自己と一つなりと考え、他の生命に献身的に奉仕する。他の運命を自己の中に体験し、己が仇いた為に他の生命が促がされ救われれば、それを至福と感ずる[27]。そして自己は猶地上的なもの時間的なものの中に留まり乍ら超現世的な絶対的全体者に参入するものと思い、諸々の世界的存在としての位置から超自然的世界に座席を移す事が出来るのである。そこには自然的世界と超自然的世界の相互滲透という事がみられるのである[23]。色即是空、空即是色の境地に比しえよう。

かかる神秘主義においてはじめて世界生起の現象をその儘うべなう諦念と共に、その中に生きんとする意志を認めそれをのばす世界人生肯定の為に、自己の献身に於て全体者に参与する倫理が結合され、一貫した思想体系を持つ世界観が確立され、現実に即した思考より出発して完成した様式[29] を備えたものとなると云えよう。そして之迄の世界観は諦念の世界観はあつたし、世界人生肯定の世界観も存したし、倫理的要求を充たさんとする世界観も存したが、之等三要素を同時に結合する世界観は存在しなかつたと彼は才六、七、九巻の世界観の歴史に於てのべている。

三、倫理の諸問題

<**自己完成と献身の問題**> この両者を結びつける考えとして二つをあげる。一つは倫理的なものの内容として

(19) 才十九巻イエス伝研究史 P319
(20) 平凡社　哲学事典神秘主義の項
(21) 才八巻　P339
(22) 才十一巻　使徒パウロの神秘主義 P176
(23) 才九巻　P289
(24) 才九巻　P290
(25) ヘルマン・ジーベツク、ゲーテの世界観（理想性）P142
(26) 才十一巻　P207
(27) 西谷啓治、前掲書　P18
(28) 才十巻　P189
(29) 才九巻　P27

認められている献身を、人間の自己完成に属するものとして把握しようとするものであり、他は自己完成から発して献身を自己完成の思惟必然的な内容として把握しようとするものである。しかし献身を自己完成の中に含ませるという事は果して可能であろうか。彼はいう。今迄の倫理ではこの両者の関係は明らかでなかつた。献身の倫理が自己完成の倫理を受入れる為には後者のように普遍的になり、献身を単に人間と社会ばかりでなく、世界に現われる生命一般に向上させ、人間の人間に対する態度は人間が存在及世界一般に対する関係の一表現にすぎないという観念に迄高まらねばならない。かく宇宙的になれば自己完成と結びつく希望を抱きうる。

又自己完成の倫理が献身の倫理に応じうる為にはそれ自身がまず正しく宇宙的とならねばならない。その為には存在への外的自然的従属を存在への内的精神的な献身に変え、事物に対する受動的又能動的な態度を献身により規定しようとしなければならない(1)。即ち外的存在をもその自己完成を達せしめる様配慮し、之を援助する事に於て他者との合一を計り、全体者の意志世界精神に参画するという事でなければならぬ(2)。宇宙的に拡大された肯定の自己完成が現実界と絶えず生々潑剌と即物的に対決して、否定の献身を交錯させつゝ、無限の責任の下に過す処に両者の結合は見出される。私が一匹の昆虫を水溜りから救い出す時生命が生命に自己を捧げたのであつて、生きんとする意志の自己分裂は除かれたのでありなんらかの途で私の生命が他の生命に献身する時、私の有限な生きんとする意志はすべての生命が合一している無限な生きんとする意志との合一を体験するのである。

<倫理的人格の倫理と社会倫理> 次に問題となる事は人間が究極の目標とする善の実現は個人の自己完成によつてであるか、それとも社会の在り方を確立する事によつてであるかという昔からの問題である。

歴史的には倫理的人格の倫理よりも社会倫理が強調せられ、人間性は没却せられ、個人人格の尊厳は無視せられてきた。献身の美徳も上から忠君愛国として社会倫理に奉仕せしめられてきた。しかし民主主義の発展により個人の主体性を認める人格の倫理が社会倫理と対立し、頭を中に入れ込ませてきた。それも17—8世紀の自然科学の発達、産業革命により物質的文化の成果が一部の少数の人達により自由に支配され、多数の人々はその下に自由と思考力をなくす事により、精神の萎縮が始まり、精神的文化の発達は停滞し、文化の自滅作用が進行している。之は恐るべき二度の大戦を起した最近の三十年の諸事件を思う時進行していると答えざるを得ない。未来への希望は一つ。即ち我々は見失つた本道に引き返さねばならない。宣伝の代りに真実を真に理解する力を、今日行われている愛国心の代りに全人類にとつて恥ずかしくない目標をもつ高貴な愛国心を、偶像化されたナショナリズムの代りに共通の文化をもつ一つの人類を、真の理想主義を欠いた社会の代りに文化国家への理想を、真実の精神性を失つてしまつた心の代りに進歩の可能性への信仰を立てねばならない。個人の主体性、人格の尊厳性に目覚める倫理的人格の確立、そしてかゝる個人の献身による能動的自己完成の倫理によつて之迄の社会の立場から考えられた社会倫理を修正しつ、倫理的社会の倫理を再建して行く事こそ倫理の完成である(3)。

従来の倫理はどこ迄も断片的であつた。印度の受動的自己完成の倫理、欧州古代人の受動的諦念倫理、中国人の能動的自己完成の倫理、それらは悲観的か楽観的であつた。近代欧州哲学は専ら社会の倫理を問題にした。勿論カント、フイヒテ、ニイチエ等の念頭には能動的自己完成の倫理があつたが諦念倫理がなく、義務の倫理即ち能動的倫理を以て完全な倫理とみた。それ故真に世界人生の諸相をみているとは云えない。社会倫理は民族国家の発展の為に献身を強要し、個人を犠牲にした。

<倫理の三つの敵> それは三つある。才一は無思想状態という事である。それは知らぬ間に我々の中に入り込み我々を蕩かす公然の敵にはならないが手強い敵である。才二は利己主義の自己主張である。之は世界生起の残忍さを必然的とみて、自己のみは勝者として敗者の人生を否定し、自己の生を肯定する矛盾に陥る。才三の敵は社会である。社会の名により個人の人格、人間性が無視没却され、その為文化は崩壊した。人々は社会の繁栄の中に個人は思惟する余裕をなくし、力を失い、社会に倫理を委ねて倫理を見失つてしまつた(4)。マスコミの宣伝の力は大きい。

我々は自己の幸福も他の損傷から築かれている残忍な必然性の中で之を最小限に食止める決意と、他の犠牲に対する責任を感じ、自分の生命、所有、時間、権利、幸福、平安のどれ程かを捧げて、人間性に立脚した生命及個人の幸福の為、更に世界の生きとし生けるものの幸福の為に最高度に顧慮し、自己の責任に於て努力して人類に至る社会への過程である国家を文化国家たらしむべく努めねばならない。

<附記> 本篇は夏休み中の短時日の間の研究の為皮相的な纒めによる紹介といつた程度のものにしかならなかつた。しかし一応シュヴアイツアーの生涯と思想を知る

(1) 才七巻 P298～9
(2) 〃 P308
(3) 才六巻 P313才七巻 P293
(4) 才七巻 P320～33

べく白水社版の全集十九巻とその他彼についての伝記等を読み、彼の思想をその形成過程に留意しつゝ、纒めてみた。序論で彼の今日の思想の根幹となつたものを彼の幼少年時代の性格、態度や受けた感化から、又青年時代の読書による影響から探つてみた。本論はその発展成果をやはり発展史的に扱いつゝ文化の崩壊、批判の考察から世界観の探求による生命への畏敬の倫理的世界観、そしてその中に流れる倫理的神秘主義の確立の敍述と進めた。但世界観の歴史については時代の哲学者の思想批判故その思想自体を著述を読む事によつてたしかめねばならない事故大略のみで断念した。猶紙数の半減の為に極めて分りにくい点もあるかと思うが仕方がない。

参考文献　シュヴアイツアー全集
ハーゲドン、シュヴアイツアー
野村実、シュヴアイツアーを語る
高橋功、シュヴアイツアー博士と共に
以上白水社
西谷啓治、神秘主義の倫理思想
（岩波倫理学講座）
デイルタイ、世界観の研究　岩波書店
〃　〃　学　三笠書房
ヤスベルス、哲学入門　新潮社
武内義範、新倫理講座　創文社
ヘルマン・ジーベツク、ゲーテの世界観
理想社